

今月の
いいね!

深海からの使者ミズウオ



海岸に打ち上げられたミズウオ

【名前】

ミズウオ（ヒメ目ミズウオ科）

【すむ場所】

北海道のオホーツク海・太平洋沿岸、青森の太平洋岸～土佐湾

【大きさ】

全長 130cm

【当館で見られる場所】

駿河湾の深海生物（標本）

【特ちょう】

普段は深海にすむ。エサを丸のみにするため、海中のゴミも同じように食べてしまうことがある。鋭い歯と大きな背びれが特ちょう。

【担当学芸員から一言】

当館周辺の海岸では、冬から春になると弱って泳いでいたり打ち上げられたりしたミズウオがよく見られます。手にしたくなる気持ちはわかりますが、鋭くとがった歯があるため注意が必要です。(K.Y)

トピック

深海の生き物ぞくぞく！

3月に入り冬の寒さも和らぎ、日に日に暖かくなってきました。しかし、海の中の季節は1ヶ月ほど遅れてくると言われており、まだまだ冬です。この時期は海表面が冷たくなり、深海との温度差が他の時期に比べて小さくなります。そのため、深い海から海表面に深海生物を上げる際の温度変化が少なくなるので、深海生物採集に適したシーズンになります。当館でも、毎年この時期になると漁師さんたちの協力を得て、カニカゴ漁などで深海生物を採集しています。今まさにオオグソクムシなど様々な深海の生き物たちがぞくぞくと水族館に仲間入りしています。(Y.I)



餌を食べるオオグソクムシ

浜で〇〇、ダンゴムシ



ハマダンゴムシ (左) とオカダンゴムシ (右)



夜、活動を始めたハマダンゴムシ

夜の砂浜を散歩していると小さな砂浜の住人に出会うことがあります。その住人とはハマダンゴムシという日本在来のダンゴムシで、北海道から九州の砂浜海岸に生息しています。雑食性で海岸に打ち上げられた流木や海藻などを食べる海岸のお掃除屋さんとも呼ばれています。庭先などでよく見かけるオカダンゴムシよりも一回りは大きくなります。その大きさから、初めて見たときは何も考えず手の中に収めていましたが、ふと気が付きました。子供の頃とやっていることがあまり変わっていない……。

ちなみに、オカダンゴムシは明治時代にヨーロッパからやってきたとされる外来生物です。一方、日本在来のダンゴムシには、ハマダンゴムシのほかに森林などに生息しているコシビロダンゴムシなどがあります。これらのダンゴムシは、フナムシやオオグソクムシと同じ等脚目というグループに属しますが、分類上はそれぞれ科というレベルが違うため、名前にダンゴムシとついています。少し遠い種類になります。

皆さんも砂浜に出た際は、この Big なダンゴムシを是非見つけてみてください。また、ハマダンゴムシは砂浜を好んで生息していますが、各地の砂浜は海岸侵食など様々な問題を抱えているのが現状です。引き続きこれら砂浜の住人が住み続けられるよう環境を守っていく必要があります。(Y.O)

イトヒキヒメがやってきた

今年 1 月、地元の漁師さんが静岡市の沖合で釣れた深場の魚を当館に譲ってくれました。その中に 1 匹のきれいな色をした魚が混ざっており、調べたところイトヒキヒメ *Hime formosana* だと分かりました。現在、当館では初となる生体展示をしています。

イトヒキヒメは 1994 年に台湾から新種として報告されました。これまでに北西太平洋とオーストラリア北西岸の水深 120~230m より知られ、日本では駿河湾から沖縄近海にかけての太平洋と東シナ海に分布します。「イトヒキ」の名は、オスの背びれの前から 2 番目の骨が長く伸びることに由来し、今回採集された個体もこの特徴をもつことで本種に同定されました。しかし、イトヒキヒメの他の特ちょうは日本周辺に最もふつうに分布するヒメ *H. japonica* とよく似ており、両種を正しく区別するためには、ひれの色、えらの形、両目の間かくなど、細かい点を比べる必要があります。これらに加え、イトヒキヒメの新種記載論文では本種には消化管の一部である幽門垂(ゆうもんすい)が無いことでもヒメ(幽門垂がある)と異なるとしました。しかし、他の論文の中には前者に 10 本の幽門垂を認めた例もあります。幽門垂ははっきりした器官なので、あれば分類学者が見落とすとは思えません。また、数本の差ならいざ知らず、0-10 は大きな違いに感じます。同一種とされる個体間のこのような違いは、何か意味するところがあるのか。興味を駆り立てられます。(S.T)



名前の由来となった背びれ



展示中のイトヒキヒメ

※生物の状況により展示を急遽中止する場合があります。予めご了承ください。